

◇ 博物館だより ◇

国立大学法人秋田大学工学資源学部附属鉱業博物館

(Mineral Industry Museum)

〒010-8502 秋田市手形字大沢 28-2

HP: <http://www.kuroko.mus.akita-u.ac.jp.or.jp>

TEL: 018-889-2461

FAX: 018-889-2465

E-mail: w3admin@kuroko.mus.akita-u.ac.jp

1. プロフィール

秋田県は日本で最も地下資源に恵まれた地域で、かつてはたくさんの鉱山が稼行していた。日本海沿岸の地域は日本有数の油田地帯であり、昭和30年代まで秋田市街地にも八橋油田の石油を汲み上げる槽が林立している風景が見られた。一方、北鹿地域には大規模な黒鉱床があり、小坂、釈迦内、花岡鉱山に代表される金属鉱山が活況を呈していた。こうした状況の中、高度な鉱山技術をもつ人材を育成するために1910年に日本で唯一設立されたのが、秋田大学の前身の秋田鉱山専門学校である。

創立以来およそ100年にわたって研究や学生教育のために収集された地質関係の資料は膨大な数にのぼる。鉱業博物館は、これらを収蔵し広く一般に公開しており、秋田大学工学資源学部の象徴的な存在である。鉱業博物館の沿革は、秋田鉱山専門学校の列品室にはじまる。その後、新制大学発足当時の鉱山博物館を経て、1961年に秋田大学鉱山学部創立50周年記念事業として、同窓会によって集められた1億5千万円もの多大な寄付金によって、秋田大学手形キャンパスを見下ろす小高い丘の上に鉱業博物館が建設された。国学者平田篤胤大人の墓に隣接した敷地からの眺望は素晴らしく、晴れた日には西に男鹿半島、南に遠く鳥海火山を望むことができる。鉱業博物館は、鉄筋コンクリート造り延べ面積3,900㎡で、展示棟がある3階建ての円柱状本館と4階建ての研究棟から構成される(図1)。本館の中央ホールは3階まで吹き抜けになっており、まわりならせん状の階段が配置されている(図2)。中生代に繁栄し6,500万年前に地球上から忽然と姿を消したアンモナイトの形を模して設計されたといわれている。前身の鉱山博物館は、1951年に文部省から博物館相当施設の指定を受けている。秋田大学の国立大学法人化に伴い、鉱業博物館も2005年に文部科学省から改めて指定を受けた。

2. 展示内容

鉱山専門学校時代から引き継いだ標本と同窓生や鉱業界から寄贈された資料もあわせて、現在の登録標本は、16,000点以上に達する。そのうち展示棟には、約4,000点が展示されており、その多くは学術的価値が非常に高い。本博物館の展示内容には、地球科学と工学の分野がある。展示は順路に沿って、地球を構成する物質の種類と歴史、地下資源の採取、資源の利用というテーマで配列されている。いくつかの標本は、実際に手にとって感



図1 秋田大学工学資源学部附属鉱業博物館外観



図2 展示棟中央ホール

触を確かめることができる。

本館の中心、すなわち中央ホールの真ん中は一等重力点に定められており、国土地理院によって定期的に重力測定が行われている。これを取り囲むように重さ1.4トンもある瀝青炭塊や巨大な鉱石標本が置かれている。1階展示室には、世界中から集められた岩石・鉱物・鉱石・化石などの標本が展示されている。天然の岩石や鉱物は、分類上同じ名前がつけられていても、まったく異なる産状を示すことは珍しいことではない。鉱業博物館の標本は質・量ともに豊富に揃っており、それらを比較することで自然界の多様性を実感できるはずである。一般の入場者には、宝石コーナーの人気の高いが、鉱山から掘り



図3 輝安鉱 (Sb_2S_3) の標本

出されたままの状態で見られている輝安鉱、方鉛鉱、輝水鉛鉱、黄銅鉱や黄鉄鉱など、天然の輝きを放つ自形の結晶群も入館者の目を惹いている(図3)。2階は地球と生命の歴史、災害、採鉱といったテーマに沿った構成になっており、それぞれのテーマを解説パネルと標本を見ながら学ぶことができる。採鉱の展示コーナーには、安政年間の院内銀山の絵図、専門学校創立当時にドイツに留学していた教官が購入・寄贈した鉱山模型(図4)、明治時代のドリフターなど貴重な資料がある。3階に上がると、正面壁の大きな展示が目飛び込んでくる。これは日本地質産産図(縮尺25万分の1)で、全国の地下資源分布と地質との関係が良くわかるように工夫されている(図5)。3階には、石油、石炭、地熱、原子力などのエネルギー資源に関する展示、最先端の材料と材料加工を学ぶコーナーなどがある。また、併設されている研究棟には、最新の超微量成分分析装置を備えた実験ラボがあるなど、学部の研究施設として利用されている。

常設展示のほかに、年2回企画展が催されている。前期は博物館主催で行われ、最近扱われたテーマの一部を挙げると、石油開発の歴史、日本海中部地震と津波被害、地熱エネルギーなど自然災害や資源に関するものが中心である。後期は、工学資源学部の各学科持ち回りで先端技術に関する多様なテーマが催されている。その他にも、講演会、子供科学教室などのイベントや科学技術週間にあわせての無料開放を行っている。

3. これからの鉱業博物館

ここ数年の年間入館者数は、約1万人前後で推移しているが漸減傾向にある。2004年度から国立大学が法人化され、鉱業博物館も今後ますます入場者増の実績を求められることになろう。しかし、アンケート結果によると、地元秋田の中高生でも鉱業博物館の認知度は予想以上に低い。1994年に秋田県最後の鉱山も閉山し、鉱業が栄えていた昔の面影は今の秋田にはない。秋田の地下資源が、かつての日本の近代化を支えてきた輝かしい歴史を知ら



図4 ドイツ製鉱山模型



図5 3階展示室の日本地質産産図

ない若い世代にしてみれば、地下資源や鉱業に関連した学科や博物館が秋田大学に存在している理由すら理解しにくいことかもしれない。これまで以上に博物館が認知されるよう努力していかなければならない。

本博物館では地球科学と工学の2つの分野を扱っている。一見、無関係と思われがちであるが、両者は資源学という分野でしっかり結びついている。これからの資源学は地球環境問題やリサイクルにも密接に関連しており、地下資源の採掘を目的にした従来の資源工学の枠をはるかに超えているという意味で古くて新しい分野である。資源学は過去のものというイメージを払拭し、地球科学と工学の最先端の研究成果を紹介し、資源学に関する理解を深め普及させる努力をさらに続けていきたい。

(利用案内)

休館日：月曜日(月曜日休日の場合は翌日) 年末年始

開館時間：午前9時～午後4時

入館料：大人250円 中学生以下130円

30名以上 大人190円 中学生以下100円

*案内を希望される場合は、事前に連絡してください。

(文責：西川 浩)